

ヨシでびわ湖を守る ネットワーク通信

02

VOL.



2010. 1. 25 西の湖のヨシ原

2月号は、「特集」と「メンバーコーナー」を設け、みなさんにご紹介させていただきま
す。

びわ湖の周辺にはどれくらいヨシがあるのですか？という質問を受けることがよくあります。

ヨシの
まめ
ちしき

びわ湖を知る ■ 問題



<問題>びわ湖ではじめて大規模な淡水赤潮が発生したのは何年でしょうか。

- ①1969年 ②1977年
③1980年 ④1983年

びわ湖検定 受験参考用問題&解説集より

一般的に言われているのは、ヨシ原面積は昭和28年(1953年/半世紀程前)頃には約260%だったものが平成3年(1991年)頃には約130%に半減してしまったそうです。そのため、県は平成4年(1992年)ヨシ群落保全条例を定め[守る][育てる][活用する]を柱にヨシの再生を図っています。その後、130%の面積を維持してきましたが、最近の調査結果では170%程まで回復しているそうです。

きっと多くのボランティアによる、ヨシ刈りや植栽の結果が少しずつ実を結んでいるのでしょうね。



滋賀県水産試験場長 藤岡様より

かけがえのない自然

【山から川～びわ湖への繋がり】

びわ湖のヨシ帯を考える時、山から川を通してびわ湖までを連続した繋がりとして考える必要があります。山から流れ出る土砂は川を伝い、河口やびわ湖に堆積することで砂泥地帯を造り、その地帯を中心にヨシ帯が広がっているからです。ヨシ帯は昭和28年当時と比べると半分に減っており、その最大の原因は内湖の埋め立てや湖岸の開発の影響ですが、びわ湖に注ぐ川にダムや堰堤などが造られたことも原因の一つと考えています。ダムなどが出来ることで山からびわ湖への砂や石の自然の流れが途切れてしまっているからです。

私たちはダムのおかげで「便利で安全な生活」を手に入れることが出来ましたが、一方で山から川を通してびわ湖へと繋がっていた自然の循環をなくし、そこに棲む生き物の生存を脅かし生態系にも影響を与えてしまっています。また、本来下流へ流れるはずの土砂がダムに溜まり、莫大なエネルギーを使ってダムなどに溜まる土砂を取り除いたり、ヨシ帯を人工的に造成したり、本来の川の流れがあれば不要な費用を使っている現状があります。人は便利さと引き替えに知らず知らずのうちに失って行くものも多くあるのではないのでしょうか。

【水産の立場から】

びわ湖では、日本で最初の淡水真珠(びわパール)の養殖生産が行われ、昭和55年頃には中東やアメリカに輸出され50億円程の商いがあったようです。ところが、原因は不明ですが、養殖されていたびわ湖固有種のイケチョウ貝の多くが死滅し真珠養殖業が衰退した経緯があります。これも何か人が及ぼす自然環境の変化が原因かもしれません。貝類は、体内に水を吸い込み水の汚れを濾過してくれる能力があり、水質を自然に改善してくれていたのですが、非常に残念なことです。今でもわずかに真珠養殖が行なわれているのですが、中国に技術が渡り、ヒレイケチョウ貝という貝で養殖された淡水真珠が出回っているようで、こんなところでも中国パワーに圧倒されています。



ヒレイケチョウ貝

次に、ヨシ帯についてお話をさせていただくと、ヨシ帯は魚の稚魚が育つ、いわば魚の保育所の役目を果たしており、なくてはならない存在です。特に、魚の繁殖には水に浸かっているヨシ帯が大切です。ニゴロブナやコイなどの魚はヨシ帯内で3月から7月頃まで産卵し、ふ化した稚魚はしばらくの間ヨシ帯で過ごします。びわ湖の水位は春頃から下げられて行き、ヨシ帯も水位によって水に浸かったり浸からなかったりするわけで、水際のヨシは絶好の産卵場となります。ですから、ヨシ刈り時には、あまりきれいに刈ってしまうと水際は魚のために残しておいて頂きたいのです。要するに、ヨシを刈ることでヨシ帯を保全していくことと、生き物の生息のバランスが大切だということです。ヨシ帯は魚にとって繁殖の場となる貴重な生活の場なのであります。

【自然との共生】

人間は、常に生活を楽にすることを追求してきました。あまりにも便利さを求めた結果、他の生物の生活を無視し過ぎてきました。ここで考えを改め、反省し自然をもどすことを真剣に考える時期が来ていると思います。今ならまだ間に合います。自然の循環をもどすには多くの時間とお金が必要です。その場しのぎの対応をするのではなく、本来の自然のしくみ(循環)にみんなが目覚めてこそ環境が持続的に維持されていくのではないのでしょうか。

目から鱗が落ちた話

ある日、大阪の漁業組合の北村さんという方から「リエデンの件で」と1本の電話が入りました。当時は、まず地元から広めようと滋賀県内を中心に営業活動をしていた私にとって「何で大阪の漁協から・・・？」との思いがあり内容をお聞きするため先方を訪問。

お会いしたのは大阪市漁業共同組合・漁場環境委員会委員長の北村光弘さんでした。

内容は、同委員会メンバー10名の名刺をリエデンで作りたいとの事、営業として有難い話です。

印刷仕様などの打合せを進めつつ「大阪までリエデン広まったのかなあ？」と試してみたり「大阪の漁場環境とヨシ？」大阪湾に生えてるのやろか・・・？

「あの～北村さん、何で大阪市の漁協さんがびわ湖のヨシ名刺を？」と尋ねてみました。

北村さん曰く、漁業はそもそも船や網など投資が大きい上に海上での重労働と危険が伴う。そんなリスクのある漁業は残念ながら後継者が育たず衰退してしまう。それを食い止めるためには、小舟と少しの道具でできる淀川でのシジミ漁なのだが、シジミ漁は川の水がきれいなことが条件である。

淀川の水はどこから流れてくる？「びわ湖です」びわ湖の水をきれいにするには淀川にシジミを取り戻し、衰退しつつある漁業の再生に繋がる。

北村さんは、大阪から実際にびわ湖のヨシ刈りボランティアにも参加され、びわ湖の環境保全活動にも積極的で、リエデンプロジェクトもこのヨシ刈りで知り、ヨシ活用の実践としてリエデン名刺を作りたいとのことでした。

びわ湖・淀川水系の環境保全を訴えながらリエデンの営業活動をしている私ですが、自ら生活や伝統ある漁業を守るため環境保全活動に真摯に取り組まれている大阪市漁協・漁場環境委員会様がリエデンプロジェクトに共感と賛同をいただき、名刺のご注文を頂けたことは私にとって感激と同時に目から鱗が落ちた思いでした。

後になり知ったことですが、当漁協さんは関連機関等とびわ湖・淀川水域の水質浄化のため、EM活性剤(有用微生物群)による浄化活動を長年継続されており、その甲斐あって今では「淀川でシジミ獲り」のイベントが開催されており、シジミの漁獲高も上向しているようです。

「淀川の水はびわ湖から流れてくる」当たり前の事実ですが、ものすごく重要な事実であると再認識しました。



大阪市漁業共同組合 北村様



水揚げ直後のシジミ



EM泥団子

ヨシ刈りを行います。ネットワークの皆さんの多くの参加をお待ちしております。

※先日お送りしました案内をご覧ください

お知らせ

メンバーコーナー

「エコキャンドルナイト」の感動を パナソニック(株)HA社 金田様より



滋賀県が主催するイベント「しが子ども文化芸術祭」が昨年10月17日(土)、滋賀県立芸術劇場「びわ湖ホール」(大津市)で開催されました。

そのなかのイベント「エコキャンドルナイト」にパナソニック(株)HA社・コクヨ工業滋賀・近江鉄道(株)・油藤商事(株)・立命館大学Reco.labの5者がプロジェクトを組み、企画運営しました。

当日は雨の中、プロジェクトメンバーが4時間をかけて、約3500個のキャンドルをセットしました。灯をともし頃には雨もやみ、風も弱まり、湖岸の風景と船灯にキャンドル特有の幻想的でロマンチックな灯が調和し、来場された方々から感嘆の声が上がっていました。

子どもたちが持参した手作りの廃油キャンドルとヨシ紙を巻いた笑顔灯籠100個の灯りも、きれいなオレンジ色を放ち、この「エコキャンドルナイト」のテーマである「いつまでも笑顔でびわ湖を眺められるよう大切に守っていこう」を主張しているようでした。プロジェクトメンバーも準備作業疲れを忘れ、しばらく見とれる時間が流れ…同じ志を持った仲間が一つのイベントを創り上げた喜びをかみしめながら、キャンドルの灯りに浸る感動的な夜を過ごすことが出来ました。



編集後記

ところで、今まさにヨシ刈りシーズンの真っ最中です。各地でヨシ刈りが盛んに行われており、ネットワークでも参加を予定しています。ヨシ原を守るといことは、多くの生物の棲み家を守ることであり、最近よく耳にする「生物多様性」に繋がっています。一つの生物だけの生存は不可能で、多くの生物の連鎖によって生態系が守られ、自然環境が成り立っていて、その循環の中に人の営みがあるのだらうと勝手な解釈をしています。

皆さんもヨシ刈りを通じて想いを巡らせてみてはいかがでしょうか。

REEDEN

びわ湖を知る ■ 解答

②1977年
原因はウログレナと呼ばれる植物プランクトンの異常発生で水温が15から20℃になる春頃になると発生しやすくなります。